

# 仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第五号

## ことばとその周辺 第五回

仙台周辺で広く文学にかかわる活動に取り組みたい方々を募集し、紹介するコーナーです。

### 宮城県工業高校文芸部

#### 「独り書く人たち」の不思議な結晶

後藤紗織さんが三年生になると、文芸部員はたった一人になっていた。部員募集のために一人で福んだ「桜アンソロジー」花見を呼び掛けたら三年生が四人、一年生が二人、仲間ができた。

孤独な格闘のはずだった文芸部が、次々と共同作業に取り組んだ。部誌「凧」の発行。宮工祭での発表。高等学校総合文化祭。そして仙台文学館を会場に開催された第五回高校生文芸道場宮城大会「ひよっこり文芸島」では企画・運営に、また作品応募にと。

部誌の誌面にも展示発表にもインターネット料としてのこだわりを注ぎ込んだ。部長の後藤さんと板橋万里子さん、佐藤愛さん、菊地綾さん。ひと足先に入部した高橋円香さんから「きっかけをもらった」同じ



学園祭の展示品を手に、部室長屋の前で

高橋かおる先生(左)と佐藤玲子先生(右)が北海道・東北ブロックの応募作品百五十点から選りすぐった十六点の一つとして、唯一の男子部員鈴木陽介君は、高等学校総合文化祭の実行委員として活躍。持ち前の明るさと懐の深さで部の活動に元気を吹き込んだ。

「私は明らかに誤字脱字を正しただけ。人ひとりの思いを大切にしたいから」と作品を見守った佐藤玲子先生。部誌に自作を寄稿し、産みの苦しみを分かち合った高橋かおる先生は「自分の世界を大事にしている彼女達が時折、眩しかった」と語っている。

いつもは各々の宇宙で言葉を紡ぎ、時には力を二つに合わせた「独り書く人たち」の不思議な結晶。卒業の季節を迎えて昇華してしまうけれど、それは確かに存在していた。(T) ●問い合わせ先 電話(022)231-1565 宮城県工業高校



学園祭の発表で展示した「文学オブジェ」。後藤紗織さんが製作した

●第四回詩のボクシング宮城大会が三月七日(日)に開かれました。今回は初めて中学生三名が参加。そのうち大槻徳郎君(15)が予選通過し、一回戦で昨年優勝者の日野修(はる)うららひの(さん)と対決しました。惜しくも敗れたものの、会場は最年少の朗読ボクサーに熱い声援をおくりました。日野さんは二連覇を達成、十月九日に設けられたイイノホールで開かれる全国大会に出場します。

●館内の喫茶「杜の小徑」では、企画展にあわせた創作料理が味わえます。店長の三山さん、その時々々の企画にアイデアを得ながら、旬の素材を活かした安全、安心の手料理を心がけているそうです。「原阿佐緒展」の時には、阿佐緒の好きだった鮭や酒粕を用いた「白ゆり膳」が好評でした。次の「宮沢賢治展」ではどんなメニューが並ぶのでしょうか。



阿佐緒の筆名「白百合」にちなんで名付けられた「白ゆり膳」

●昨年の秋から始まった、武田こうじさんのリーディングライブ「Four Seasons」ライブ

## 学芸室日記



足元の白い線には詩のことばが散りばめられています

●プロを支えるスタッフはリーディングの世界の楽しみ方、楽しませ方を熟知した、その道のプロ。ステージの組み方、イスのならべ方、どれをとっても斬新なアイデアが光ります。四月二十九日の次のライブでは、池の中の石舞台を使う予定です。いったいどんな演出になるのか、今から楽しみます。

●四月からの「宮沢賢治展」では、講演や講座のほか、朗読と音楽の調べ、親子で楽しむ「七ロ弾きのゴロシユ」朗読劇、劇団OUIによる賢治を題材にした寸劇なども開催する予定。展示とはまた違う面白さがありそうです。



2004年4/17[土]~7/11[日]

## ささやかな儀式

ルイ十四世の時代に辣腕をふるった政治家がいます。名前をジャン・パチスト・コルベール(二六・九一八三)といい、財政の最高責任者として、さまざまな制度を創設しました。なかでも、有名なのはたぐさん税金の名目を考え出したことで、そこで彼の墓碑銘は次のようです。

ありとあらゆる租税を発明した男  
ここに眠る  
ここを通る人びとよ  
この男の安息のために祈ってはいけない  
なにしろ、すべての人びとから  
安息を奪ったのは、この男なのだから

右にならって、文学館の入り口に掲げる文句を案じたことがあります。それはこうです。  
ありとあらゆる物語を発明した人たち  
ここに眠る  
ここに入る人びとよ  
これらの人たちの安息のために祈れ  
なにしろ、すべての人びとに  
安息を与えたのは、この人たちのだから  
あまり面白い言い換えにはなりませんでしたが、それでも私は、文学館に入るたびに、この文句をぶつぶつ呟くのを、自分のささやかな儀式にしています。

仙台文学館

館長 井ノ口



仙台文学館 Sendai Literature Museum

仙台市青葉区北根2-7-1 TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044 http://www.lit.city.sendai.jp/hp/index-sml.htm



オウイデウス著

# 『転身物語』

## 詩人と神話と歴史

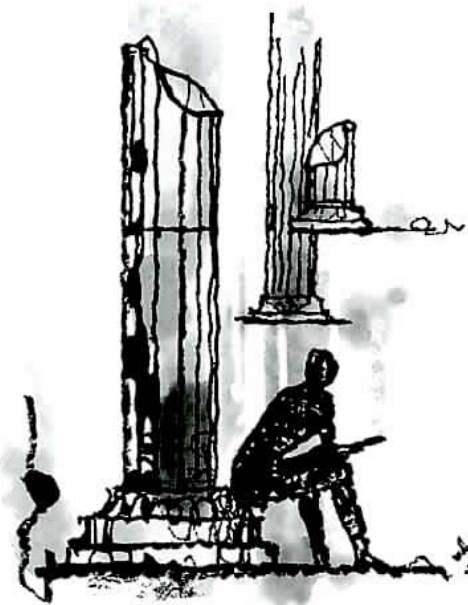
オウイデウス  
転身物語

田中秀央訳  
人文書院

『転身物語』  
オウイデウス著  
田中秀央、前田敏作訳  
人文書院

この分厚い本は一九六六年六月に刊行されている。つまり、私の十九歳の年ということになる。

これは当時の私にとって、まずうっとりと見とれてはいるほかに、重くて高価な本だった。定価千七百円と奥付けに書いてあるけれど、そのころ、いわゆる「純文学」の単行本はだいたい三、四百円という時代だったので、現在の一万円ぐらいの金額に相当したのではないかと、思う。少なくとも、まだ十九歳だった私にとっては、このと



んでもなく高価な本が、それでも私は欲しくて欲しくてしかたがなかった。

書店で手にとっては溜息をつき、棚に戻すことをくり返していた。見れば見るほど、装丁の趣味はよく、銅版画の挿絵も美しく、みことな索引も、そしてギリシア神話に関連する地図が付録としてついているのさえ、私には魅力的に思えた。

さんさん迷った末に、いったい、どのようにお金を用意したのか、それは忘れてしまっているが、とにかくある日、私はつ

いにこの本を買いためた。もしかしたら、自分の結婚を決めるときなどよりも、この

買物には決死の覚悟が必要だったと言え、私に言ってもなく、その結果の満足度は大変なもので、それ以来、本についてはかなり平気で散財する「くせ」がついてしまった。

一冊の本について、その装丁から中身にいたるまで、隅から隅までなめるように楽しんだのは、このときが私にとって初めての体験なのだった。十九歳の女子学生にとって自分で買う本は文庫本であり、そして単行本とは図書館で借りて読むものだった。それが突然、こんなに立派な本を自分の所有物にしてしまったのだから、それだけでも夢中にならないほ

うがおかしい。物質としての「本」の魅力にとりつかれたのがよいことだったのかどうかなる。



のか、私にはよくわからないけれど、一度、おぼえてしまった贅沢な味はもう忘れられない。とくに文学の「本」については、その装丁と中身の調和が読者の快楽として、どんな時代になっても生きつづけるにちがいない、と私がかたくなに信じているゆえんでもある。

言うまでもなく、この本についてはまず、「転身物語」という題名がなんとも魅力的なものだった。生きとし生けるもの姿がべつ姿に変わる話、妖怪変化の話、霊界の話はともども、私の好みにはかならなかった。そして、オウイデウスという聞いたことがあるような、ないような著者名。装丁としては、

本を収めている箱に使われているコバルトブルーの波線、本体の布装の薄い青と緑の微妙な色合い、その背に印刷されている金色の題名、それを包むビニールカバーの淡い水色、そうしてウイーンで出版された本に使われていたという数多くの銅版画をまずそれぞれ飽かず眺め、楽しんだ。そうして最後に、中身のおもしろさに夢中になった。

それまでの私にとって、ギリシア・ローマ神話は野上弥生子の翻訳したブルフィンチの世界に限られていた。おもしろくないこともなかったけれど、夢中になるという世界でもなかった。どこか、「教養」としてこじんまりとまとめられた「お話し」という感触がつかまっていたからなのかもしれない。ところがこの『転身物語』はいわば、その原典に当たるものなのだ。内容は膨大なもので、宇宙がどのようにできたのかという古い創世神話からはじまり、最後は現実の政治家であ

り、英雄でもあるカエサルにまでつながっていく。人間にとつての「物語」のダイナミックな流れがここには記録されているのだった。神話の世界と人間の歴史との関係をこのとき、はじめて知った思いがして、私自身の世界がぐんぐんひろがっていくめまいのするような感触もあった。

そしてさらに私にとって印象的だったのは、そうした物語を語る人の役割というものの、ここにはあざやかに浮かびあがっていることだった。詩人オウイデウスはローマ帝国の最高権力者である皇帝カエサルを称賛するために、ギリシア時代から伝わってきた神話をまとめあげ、それをカエサルの

偉大さにまでつなげているのだ。まるでこれは日本の「古事記」と同じではないか。その発見は私にとって、忘れたい大きな経験となったのだった。

この本についてこうして振り返ると、人と本との出会いには不思議な必然性がある、と今更ながら思わずにいられなくなる。



津島佑子(作家)1947(昭和22)年、東京都生まれ。78年「龍児」で女流文学賞、83年「黙市」で川端康成文学賞、2001年「笑いオオカミ」で大佛次郎賞を受賞。03年には「日印作家キャラバン」の実行委員会会長をつとめるなど各国の文学者たちとの幅広い交流でも知られる。最近、「文学界」に「ナラ・レポート」を連載。



### 森林太郎(鷗外)に宛てた落合直文の書簡(複製)

本多 真紀 (仙台文学館学芸員)

夜もすがら御さまたげいたしまこと失敬。さて令妹君の御作のうち、マンフレツトの中に左の語ありとおぼえ候。

ふるへしめむ

右は話法上いかゞはべらむ。ふるはしめむの方か、ふるはしめむはふるより慥動の方へも用ひきたり候。御かきあやまりか、或は小生の見あやまりか、いづれにも、ふるへしめむとあらむには、実に美玉の瑕ならむか。御校合のをりにても一寸御注意被下度。おもひいでしま、頓首。

七月廿日 落合直文  
森林太郎殿 侍史

当館では、宮城県気仙沼出身の歌人・国文学者である落合直文が、森鷗外に宛てて出した書簡の複製を所蔵している(原資料は文京区立鷗外記念本郷図書館蔵。正確な年代は不明だが、

通泰(のちの国文学者)、小金井喜美子(鷗外の妹)ら十代二十代の若者たちで、外国語に秀でた鷗外から原詩の大体の意味を聞き、各人が分担して訳すという作業を行っていた。

美子の当初の訳では「ふるへしめむ」となっていたらしく、直文は書簡でその文法的な誤りを「美玉の瑕」として指摘したのである。

内容から、明治二十二年八月に刊行された翻訳詩集『於母影』に関連したものと推測される書簡である。

その様子は直文の書簡からも垣間見ることができ、文面にある「マンフレツト」とは、『於母影』に取められたバイロン原作の長編劇詩の抄訳であり、『於母影』では訳者名は明記されていないが、『令妹君の御作』との記述から小金井喜美子による翻訳だと推定される。そのなかの一節、「恐しきしるしめて汝等をふるはしめむ」という部分の「ふるはしめむ」という語句が、喜

美子の交流を背景にしたものであり、また、ともに新しい時代の文学を「ころざし」のちに「文豪」と呼ばれる鷗外に示唆を与えた、直文の存在の大きさを改めて感じさせる資料でもある。



# 「相剋の森」

## 「現代のマガギを追う」

熊谷達也

### 「マガギサミット」 での出会い

二〇〇一年です。それからちょうど一昨年の夏、新聞連載のお話をいただいたことが「相剋の森」という小説を書いたきっかけです。

教職を辞めた後、保険の代理店を自営しながら書いた小説が新人賞を受賞し、ようやく作家として認められ始めた頃。駆け出しの僕に新聞連載の話なんて頼んでもない話でしたが、配信社からのリクエストは「現代もので、ある程度社会性があるもの。それからあまりにも暗い話は困りますよ」とだけ。準備期間はせいぜい二、三か月で取材の時間もなし、何を書くのかと困っていた時、いいことを思いついたんです。

実はその頃、大正から昭和初期にかけてのマガギの小説を書くことと準備を進めていたので、その近代のマガギについての取材をもとに現代のマガギの小説を書けないだろうか。新人賞をいただいた「ウエン

カムイの爪」というデビュー作では、自分では野生のクマとなんて出くわしたことがなかったのに、さも経験があるように書きました。それがなんだかずつと後ろめたくて。だから今度自分の目で、野生の動物と向かい合う現場を見てみたい。見てきたような嘘ではなく、今度見えてきた上で嘘を書いてみよう、と。

二〇〇一年の六月、マガギの里といわれている秋田県の阿仁の打当というところで開かれたマガギサミット、正式には「フナ林と狩人の会」に参加しました。

その宴席のこと。広い座敷でたまたま向かいの席に座った、僕より二つくらい年下、四十歳くらいの非常に気の良さそうな田舎の青年と仲良くになりました。

「いやいや俺んとこよー、すごい田舎なのよー」どこですか「新潟県。はー、知らないと思うけども、二十軒しか家ねえんだよなー」しまいには「じゃ、

今度うちの村来てみるよ、いいところだからよ」と。

彼が「相剋の森」に出てくる若い頭領のモデルです。小説の中にでてくる熊田という集落は、実は彼の住む「山熊田」なんです。

誘われて乗り込んだマガギ村の取材は、ただただ大変でした。何が大変かって、二日酔いが最初に行ったのが九月。頭領は普段は運送会社の事務員さん。金曜日の夕方五時頃彼の家に着くと、「今日は俺らの若い衆呼んであったからよ、後から先代の爺や(親方)も来つからよ、その前に風呂入れ」って歓迎してくれて。若い衆っていうものだからいつぱい来るのかと思つたら、現れたのはたった二人。なにぶん二十戸の集落ですから、若い衆といってもそれだけなんです。

風呂上がりさらにその若い衆二人を加えた四人でたちまちビール一ケースを飲み干し、へべれけになったところに爺やもやって来て、それどころかよく正式な宴会の始まりです。

無口なマガギの親父らしくね。俺らの村を題材にしてこういう本を書いてくれて、あんたをこの村に呼んでよかった」ってまで。ああ、もの書きになれてよかったな、彼らと出会えてよかったな、少なくとも彼らが困るような本にはならなかった。それが非常に嬉しかった。

来年(平成十六年)一月には、「相剋の森」の若いマガギの頭領の先祖のマガギが主人公となる本を出版します。まだまだマガギの世界には興味が尽き

僕はけっこう飲める方ですが、その村では最後まで起きていられたことは一度もありません。途中から意識がないんです。程よく飲めるけれど自分たちよりは確実に酒は弱いって言うところが、おそらく彼らにとってはおそらくかわいいでしょ。おかげで上手く溶け込め、「来年の春、クマ狩り見に来いよ」と、初めて訪れたその日に誘ってもらえたんです。

### 山は半分殺して ちょうどいい

そのクマ狩りがどうだったのか。山の様子、クマ狩りの現場。それらは、ほとんど「相剋の森」に書いた通りです。もともとが新聞連載なので本にはあまり書きませんでした。が、実際にクマを解体する現場をこの目で見て僕が一番びっくりしたのは、それが不思議と気持ち悪くないということでした。内臓を全部取り出してバラバラにするというのに、手際がいいから、無用にグチャグチャ

### 山は半分殺して ちょうどいい

「マガギたちは果たして現代にどうやって生きているんだろうか」が、「相剋の森」の大き



熊谷達也  
「相剋の森」集英社刊  
2003年

チャにしたり、余計な血が流れたりしないんです。

クマが獲れると、クマ祭りといってクマ鍋を作ってみんなで会食します。これが彼らの一番の楽しみなんです。クマ鍋もうまいですけれども、狩りそのものが楽しいんです。それを頭から否定しちゃうのはまずいと思います。

同級生も何人かいたらしいのに、頭領だけがこの村に残った。残った理由は一つ、クマ狩りだよ。クマ狩りがなかったらこんな村の生活、不便だからいやだもん。年に一回クマ狩りの楽しみがあるから、辛うじて踏みとどまってるこの村を守ってきたというんです。

「……感動した。書いてくれてありがとう」

この本を出す時に心配だったことがあって、それはノンフィクション的な要素がかなり強いので、山熊田の八人の頭領さんたちに迷惑をかけてはいけないということでした。完成の報告にと頭領に本を送ったら電話をくれたんです。が、なんかちょっとムスっとしてるような気がして、「あ、あのことだ」ってピンと来たんです。それというのも新聞連載の時、本にする段階ではそうしなかったからです。

「……感動した。書いてくれてありがとう」

この本を出す時に心配だったことがあって、それはノンフィクション的な要素がかなり強いので、山熊田の八人の頭領さんたちに迷惑をかけてはいけないということでした。完成の報告にと頭領に本を送ったら電話をくれたんです。が、なんかちょっとムスっとしてるような気がして、「あ、あのことだ」ってピンと来たんです。それというのも新聞連載の時、本にする段階ではそうしなかったからです。

勝ち手に言い訳を始めようとする「いやいや、それはいいんだ」って。そしてボソリと「……感動した」と。いかにも

## Edge in Sendai

～映画の言葉、詩の眼差し～  
words of cinema, eyes of poetry

詩人の創作現場を克明に報告する映像作品の上映。直後に会場を満す朗読の音声。昨秋、2日間にわたり繰り広げられた映画と詩のイベント「Edge in Sendai」には延べ200人が集まり、ポイエーシス(創造)の現場の息吹きを共有しました。



シンポジウム「眼差しから言葉へ」では、詩と映像それぞれの創造行為の切っ先(Edge)が交錯



白石かずこ氏の朗読、長編詩「ユリシース」は聴衆を圧倒



スリリングなデュエットで現代詩の新たな姿を見せてくれた和合亮一夫妻



仙台開府400年記念オペラ・支倉常長「遣い帆」では台本を担当するなど仙台にも縁の深い高橋睦郎氏



詩人の目線で本イベントのベースでもあるCSのアート番組「Edge」も企画・監修している城戸朱理氏



宮岡秀行氏は映画作家の立場から詩人たちに創造の課題を問いかけた

Edge in Sendaiは仙台文学館とせんだいメディアテークの共催で、平成15年11月21日と22日に、せんだいメディアテークで開催されました。当日の様子は2月14日にCS放送SKY PerfecTV! 216チャンネルで放映されました。詳細は<http://www.telecomstaff.co.jp/>

熊谷達也(作家)1958年、宮城県生まれ。東京電機大学理工学部数理工学卒業。97年「ウエンカムイの爪」で第10回小説すばる新人賞受賞。2000年「漂泊の牙」で第19回新田次郎文学賞受賞。著書に「まほろばの疾風」「迎え火の山」「山背郷」「マイ・ホームタウン」がある。04年1月に、近代のマガギの世界を描いた「邂逅の森」を出版した。





# 賢治と善助をめぐる書簡

赤間 亜生 (仙台文学館学芸員)

「春と修羅」「注文の多い料理店」で知られる宮沢賢治と、仙台の詩人・石川善助に交友があったことは既に指摘されている。二人を引き合わせたのは、盛岡の詩人・森佐一(荘巳池)である。善助が編集に携わった詩誌「北日本詩人」に、森が作品を寄せたことで二人の交流が始まり、大正十四年に花巻の賢治を訪ねるに至る。このときの邂逅について善助は「大正十四年の年末宮沢賢治氏にお会いした時、はからずも『座敷童子』のお話を聞いた。その夜ひどい雪路を歩きながら再びかの日の怪異に心理を新しくした」(『寂莫記』)、「鴉射亭随筆」(『鴉射亭随筆』)という文章を残しているが、賢治に心酔していた胸中は、自身が編集していた同人誌の次の記述からも覗える。

「……の間森佐一君に会った時又いろいろ宮沢賢治さんのことを聞いた僕は話がこの人の所へ向ふといつも熱する、宮沢さんの行為作品、あの巨大なるものには心から打たれる打たれる」(『煙筒』昭和三年八月)

また、「詩神(昭和四年五月)の『私の好きな花・土地・人』というアンケートでも、『人・宮沢賢治 父母弟妹』と挙げて居る。森は『宮沢氏に会ひたが居るやうな気がする。宮沢氏の心には、石川が救はれるものが満み満ちて居るのだ。』(『石川善助』)「天才人」II、昭和七年八月」と書き残している。

「鴉射亭随筆」をめぐる書簡  
当館には、宮沢賢治が詩人・スズキヘキに宛てた書簡が、ヘキの夫人である鈴木あい氏より寄託されている。これは、散文を中心にまとめた善助の遺筆(2)という文章を残しているが、賢治に心酔していた胸中は、自身が編集していた同人誌の次の記述からも覗える。

「……の間森佐一君に会った時又いろいろ宮沢賢治さんのことを聞いた僕は話がこの人の所へ向ふといつも熱する、宮沢さんの行為作品、あの巨大なるものには心から打たれる打たれる」(『煙筒』昭和三年八月)



宮沢賢治 1896(明治29)~1933(昭和8) 提供: 林風舎  
石川善助 1901(明治34)~1932(昭和7)

「鴉射亭随筆」をめぐる書簡  
当館には、宮沢賢治が詩人・スズキヘキに宛てた書簡が、ヘキの夫人である鈴木あい氏より寄託されている。これは、散文を中心にまとめた善助の遺筆(2)という文章を残しているが、賢治に心酔していた胸中は、自身が編集していた同人誌の次の記述からも覗える。



スズキヘキ 1899(明治32)~1973(昭和48)

稿集『鴉射亭随筆』(昭和八年七月、鴉射亭友達会)の出版に關するもので、善助と賢治の交流をめぐる貴重な資料である。今回は特に仙台の詩人との交流という側面から、資料について若干の解説を試みたい。

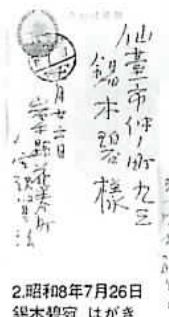
※これらの資料は、新校本全集『宮沢賢治全集 第十六巻(上)』(補遺資料篇)に収められている。また奥田弘「宮沢賢治資料」(書簡)『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』第十二号、平成八年九月)と杉浦庸「宮沢賢治資料」(書簡)『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』第十五号、平成九年九月)の詳細な解説がある。

- 1. 昭和八年六月二十四日  
鈴木信治宛 封筒(用箋なし)  
仙台市東一番町 桜井繪葉書店 交付 鈴木信治様/岩手県花巻町豊沢町 宮沢賢治

この封筒は賢治が「鴉射亭随筆」が発行されることを知った



1. 昭和八年六月二十四日 鈴木信治宛 封筒(用箋なし)



2. 昭和八年七月二十六日 鈴木信治宛 封筒(用箋なし)

賢治が、出版に先駆けて購入代金を郵送した時のものと思われる。スズキヘキ(鈴木信治)のご子息で、自身もヘキの作品と活動について調査を続けている鈴木耕吉氏によれば、この桜井繪葉書店とは、仙台の繁華街(現在の藤崎百貨店の斜向かい附近)にあり、人気俳優のプロマイドなどを扱う店であったという。「鴉射亭随筆」の奥付には「発行所 鴉射亭友達会 仙台市東一番丁 桜井エハガキ店方」とある。本の編集に当た



3. 昭和八年八月二十四日 鈴木信治宛 封筒

ていた「鴉射亭友達会」はスズキヘキや、善助の仙台商業学校の先輩で童話雑誌「おてんとさん」の中心メンバーの天江富弥など、旧知の友人が集まったグループだが、「鴉射亭随筆」のヘキの記述によれば「会員のない、会費のない、規則のない仕事のない会」という、ユニークな集団であった。この桜井繪葉書店は「鴉射亭友達会」のメンバーがたむろする場所、連絡先も兼ねていたものと思われる。宛先人の鈴木信治は、善助と

もに詩誌「北日本詩人」に関わっていた仙台の詩人であり、会のメンバーであったのだろう。

2. 昭和八年七月二十六日

鈴木信治 はがき  
仙台市仲ノ町九三 鈴木信治様  
岩手県花巻町 宮沢賢治

「鳥謝亭随筆」昨日 石川善二郎様からお送りいただきました。自画像書信等唯々病胸熱し身顫って悲しみを新にするばかりです。実に「これまでに」編纂なすった皆様に何とも感謝の辞ありません。まづはお礼乍ら。

「鳥謝亭随筆」は「鴉射亭随筆」のこと。編集に当たっていたスズキヘキをはじめとする「鴉射亭友達会」のメンバーへの謝辞を伝えている。善助が亡くなったのは昭和七年六月二十七日なので、約一年経ち感慨を新たにすることが伝わってくる。「石川善二郎」とは善助の弟で、不遇のうちに亡くなった善助の生涯とその資料を後世に伝えることに努めた。

3. 昭和八年八月二十四日

鈴木信治 封書  
仙台市中ノ町九三 鈴木信治様  
岩手県花巻町 宮沢賢治

お手紙ありがとうございました。並びに小為替たしかに接手、いろいろお手数謝しあげます。

先日母木光氏「来訪ありまして、集末だに」覧なき由お話しに付一部差しあげました処、一昨日同封小為替送りこされ出版費用中へお伝えいたし呉れよとの事、これを小生からお送りいたすのは、考へればいろいろ六ヶしい次第ですが、またこれを母木さんへお返しして更に云々といふのもあんまりですから、どうか同封手簡ご覧下すつてその辺然るべく「了解ねがひあげます。それからもう一枚の方は小生も母木氏にならうって人なみの顔をいたしたい次第併せて

ご諒承ねがひあげます。切手は前回の郵税の分です。まづは八月二十四日  
このお手紙へのお受取は「多忙中拝辞申しあげます。  
共鳴した二つの詩心  
母木光は岩手県宇石出身の詩人。後に儀府成一の名で詩や童話を執筆し、著書に「人間宮沢賢治」(昭和四十六年十月、蒼海出版)がある。「鴉射亭随筆」の母木の回想によれば、「昭和三年ころ」に「私と友だちの詩集の出版記念会が新宿

であった時」善助が「やつて来てくれた」とあり、善助が上京してから交友が始まったと思われる。賢治が善助の「鴉射亭随筆」を母木に渡し、母木から受け取った代金を、自らの寄附と併せてヘキに送ったものと思われる。

月後の昭和八年九月二十一日に、賢治もまた、結核でその生涯を閉じたのである。母木によれば、昭和八年八月十九日に、賢治を訪ねた際、その会話に「……佐藤惣之助、辻潤、佐々木喜善、森佐一(現荘巳池)、石川善助などの名も出ました。……仙台出身の石川善助については、くり返して語りました」と回想している。自らの死期が近いことをも意識していたのであろうか。賢治と善助の間には確実に共鳴するなものが存在していたのであろう。

## 第5回 悠々房

文学のある風景

### Bookish Cafe 悠々房

製本教室の取材に行くんだ、と若い同僚に告げると、意外や意外。へえ、優雅ですね、ちょっと試してみたい趣味ではありますね、と目を輝かせた。文庫本でも手作りの装丁によって世界に1冊だけの愛蔵書に生まれ変わる。ヨーロッパでは装丁が伝統的な趣味の一つに数えられるらしい。

そんな製本教室を開いている喫茶店が泉区にある。悠々房だ。「祖母が日記や身辺雑記などたくさんの文章を遺して逝ったんです。それをいくつか自分の手で本にまとめてあげたいと思って」と店主の高橋智美さんは、本の世界に彷徨い込んださきかけを振り返る。

東京の製本教室に通い、1年で依頼者の希望に応えられるようになった。「自分の本をつくりたい」と訪れる依頼者の思いと、高橋さん自身の生き方が共鳴していく。「本好きの方が気軽に立ち寄れて、ゆっくりと読める場をつくりたくて」とカフェに鞍替えしたのが昨年の8月。



高橋さんが1点1点吟味して仕入れた絵本や全集、複製版などが並ぶ新刊本コーナー。自費出版作品も取り扱う。「買ってくださった方は趣味が共通だということ。話も弾みます」

楽しみを人にも教えてあげたくなって、製本教室も始めた。販売コーナーとは別に、本の貸出もする。読みごたえのある書評やエッセイを載せた「月刊ブックッシュ・カフェ」も5号を数えて健在だ。しっかりとした深いコクと華やかな香りのコーヒーもうれしい。本の世界にとっぷりと浸りたい気分の時にはおすすめの場所を、またひとつ見つけた。(T)

Bookish Cafe「悠々房」  
〒981-3132 仙台市泉区将監1-6-6  
電話 / 022-773-7386  
e-mail yuyubow@helen.ocn.ne.jp  
url http://www.9ocn.ne.jp/~yuyubow/  
営業時間 10:00~18:30 火曜定休  
\*都合のよい日時が選べるフリー受講制の【楽しい製本教室】開催中。詳しくは悠々房へお問い合わせください。



「文庫本の装丁なら初心者でも数時間で完成できますよ」と、装丁作品を手を高橋さん。基本的な道具や材料も悠々房で揃う。

出版社の営業で経験を積み、2年前の初夏に仙台に帰って自費出版の支援を手掛ける会社を設立した。少部数の自費出版はとくに単価が高くなりがちだ。中でも製本費が高む。「何百冊も必要なのではないのに」と嘆く依頼者のために、手製本によって1冊からでも引き受けることにした。